

ユトランド半島の言語接触と言語シフト

櫻井 健

0. 序

現代デンマーク語は通常ユラン方言、島嶼方言、東部方言¹⁾の3つに分類される。このうちユラン方言の特徴としては大規模な語末音消失が挙げられる。本論で検討するドイツとの国境地域に関わるのは、このユラン方言のうち南ユラン方言、あるいはレスヴィ方言と呼ばれるものである。レスヴィ方言はさらに北レスヴィ方言、中部レスヴィ方言、南レスヴィ方言に分けられる。北と中部の境界がおよそ今日の国境である。つまり中部と南レスヴィ方言はドイツ国内のデンマーク語方言ということになる。

南レスヴィ方言を含むユランのデンマーク語方言では、比較的早い時期から長母音の二重母音化が認められる。この現象は島嶼方言では生じなかつたため、標準デンマーク語には反映されていない。デンマーク語諸方言の母音体系の比較検討によれば、この差の生じた動機は内部的に動機を持つ可能性が低い、つまり外的要因に動機づけられた可能性が高いのである。櫻井(2003)で示した定冠詞前置をはじめとした他の言語現象にも現れているように、ユラン方言域の特徴は南部の西ゲルマン語域との共通性を示すことが多く、この二重母音化も西ゲルマン語との言語接触に動機づけられている可能性を考慮すべきであろう。

中部および南レスヴィ方言域の大部分は中世から近・現代にかけてドイツ語化している。ここでの言語シフトは社会、政治、経済などの影響を大きく受けて進行した。とりわけ19世紀のシュレースヴィヒ・ホルシュタイン戦争と20世紀の二度の大戦は、関係する言語にも大きな影響を与えた、今日に至っている。

本論ではまず当該地域の言語使用に関与すると思われる歴史的、経済的背景を概観する。その後、言語接触の当事者である低地ドイツ語北低地方言およびデンマーク語南ユラン方言を検討し、両言語における言語変化プロセスに関連性があるかを考える。最後にドイツ化Eindeutschungと呼ば

れる言語シフトについて考察する。

1. ユトランド半島南部の歴史的背景

1.1.

デンマーク語でユラン *Jylland* と呼ばれるユトランド半島は、その中央部でドイツとデンマークに分かたれている。この政治的境界線は現在およそ言語境界線に相当する。しかし本来この境界は線ではなく帯状で、ユトランド中部から南部にかけてはドイツ語デンマーク語双方の話者が混在する地域であった。ユトランド半島南部の南ユラン *Sønderjylland* あるいはスレスヴィ *Slesvig* の最南部は、古くは北ゲルマン人と西ゲルマン人（とりわけザクセン人）との境界領域であった。西部にはフリジア人がアイダーシュテット *Eiderstedt* まで、東部はスラブ人がキール湾付近まで住んでいた。この境界より南方は湿地ないし森林であり天然の境界をなしていた。中世以降のホルシュタイン農民の土地改良により居住可能となり、北方への植民が始まった。

1.2.

ザクセン人は804年にカール大帝に屈服し、その地域はフランク王国の版図となった。さらに810年ころにはシュライ川 *Schlei* まで王国は拡張した。北上するフランク王国に対する防御として、北ゲルマン人のうちデーンの族長とされるグズフレズ *Gudfred* が土壘ダーネヴィアケ *Danevirke* を築き始めたのは9世紀初頭である。カール大帝の軍はダーネヴィアケで防衛するデンマーク軍と対峙することとなり、811年にはアイダー *Eider*（デンマーク語アイザー *Ejder*）川で境界が確定する。北方からの圧力で9世紀中にはこの境界は徐々に南下した。ハンブルクがデーン人によって占領されることもあった。10世紀には境界線は一進一退で、ドイツ側の勢力がアイダー川まで及ぶこと也有った（これにより上記の西ゲルマン人の入植も行なわれている）。デンマークにおいて他の北欧地域よりも早い国家形成が見られるのは、このように南方からの進出に対する防衛という明確な動機を持っていたためと考えられる。

デンマーク側が比較的強力であった背景には、当時のバルト海・北海さらにはヨーロッパまでの交易における中心地であったハイタブ *Haitabu* で

の課税が可能だったことが第一に挙げられる²⁾。ハイタブが安定したのはスヴェン王の治世下（986–1014）であるが、その後も破壊されたことがある³⁾。

1.3.

時期を同じくして、北ゲルマン人のヨーロッパ側への進出である、いわゆるバイキング活動が始まる。バイキング活動は、8世紀から11世紀前半にかけてスカンジナビアに居住する北ゲルマンの諸部族が外部に向けて行った行為の総称であるが、それぞれ個別の行為の動機はさまざまである。行動様式ごとにおよそ次の3つのグループに分類できる。①交易の拡大、利権の追及を志向するグループ。主として東方に展開し、東ローマとも接觸があった。②おもに西方、ヘブリディーズ諸島、スコットランド、イングランド東部、アイルランドなどに進出したグループ。北太平洋方面に進出するグループと、③さらにヨーロッパ主要部に進出したグループ。これらの分類はおよそ今日のスウェーデン、ノルウェイ、デンマークに相当する。フランク王国が分裂した後にはデンマーク系のバイキング活動は防衛的なものから攻勢に転じ、845年のハンブルクから低地地方、イル・ド・フランス方面へと展開している。865年以降イングランド北東部に進出し、いわゆるデーンロー地区を手中にしている。

デンマークという語がはじめて記録に現れるのは10世紀に遡る2つのルーン文字による碑文である。この語の後半部 -mørk は辺境を示すと考えられる要素で、このことからデンマークという語はこの領域より南方から見て向こう側という意味でフランク王国側から地域名として一般化されたと推測される。先に述べたとおり、この境界は線ではなく帯状の領域と認識すべきものである。この曖昧な境界領域が明確な境界線となっていくのに、全ヨーロッパ的な歴史の流れが大きく関与している。一言でいえば北ヨーロッパのヨーロッパ化である。

934年に東フランク・ザクセン朝のハインリヒI世がシュレースヴィヒ・マルクをアイダーとシュライの間に設け、デーン人との緩衝地帯とする。南側ではスラブ人との対立が生じる。ズプリンブルク家のロタールは1106年ザクセン公になると、西ホルシュタインを領地としていたシャウエンブルク家のアドルフI世にホルシュタイン伯の称号を与えた。当時デンマーク王エリックI世の息子クヌートはユラン伯であった⁴⁾。クヌート

はホルシュタインの一部を得ており、ホルシュタイン東部のスラブ人を平定し影響を強めようという利害でシャウエンブルク家と衝突した。クヌート側は敗れアドルフは1143年にホルシュタイン全土を抑えることに成功した。その結果ホルシュタインはキリスト教化され、多くのスラブ人が殺され、その土地にはヴェストファレンやフリースラントなどからの植民が受け入れられた。

アドルフの息子アドルフII世はさらにスラブ人を攻撃し、スラブ人の町リューベック近隣を開発し、後のリューベックの基礎を作った。その息子アドルフIII世は1203年に戦争の結果デンマーク王ヴァルデマーII世にホルシュタインを譲り渡すことになる⁵⁾。その結果ホルシュタインのドイツ人貴族の不満は高まった。1223年ヴァルデマーは誘拐されダンネブルク城で数年間幽閉される。ヴァルデマーは帝国領を返還し、神聖ローマ帝国の配下になるように求められたが、デンマークはこれを拒否し戦争を宣言、1225年にデンマークは敗北する。ヴァルデマーは帝国領を返還し復讐しないことを誓わされたが、翌年解放された後、教皇に誓いの無効を訴えた。続いてドイツ人貴族を攻撃し、当初は成功を収めたものの、翌年ホルシュタインでの戦いでホルシュタイン伯アドルフIV世が勝利し、同地はシャウエンブルク家が恒久的に収めることとなった。和平でヴァルデマーは帝国内における領土を永久に放棄した。アドルフIV世の死後(1261)ホルシュタインはいくつかの公領に分割された⁶⁾。

1.4.

ヴァルデマーは1232年、息子アベルのために、それまでに取り戻していたアイザー以北の領土南ユラン(スレスヴィ)を公領に昇格させた。アベルの子孫スレスヴィ公エリックが1319年に死ぬと、後継者ヴァルデマーIII世が未成年であったため、デンマーク王クリストファーII世が公領を掌握しようと試みた。しかし彼の後見人ホルシュタイン-レンツブルク伯ゲルハルトIII世はクリストファーII世を追い返した。一連の争いはデンマークへの大きな財政負担となる。さらにヴァルデマーをデンマーク王に選ぶ工作に成功したゲルハルトへの褒章は、スレスヴィ(シュレースヴィヒ)公領とヴァルデマー憲章 *Constitutio Valdemariana* と呼ばれる有名な憲章であった。1326年に出されたこの憲章の規定では、南ユランの公爵領は決してデンマーク王国に組み入れられない、あるいはデンマークと同じ君主

に統治されることはない、となっていた⁷⁾。

当時デンマークの財政は破綻しつつあり、ドイツ人（貴族）の影響は増すばかりであった。ヴァルデマー憲章への署名によりスレスヴィはホルシュタイン-レンツブルク伯のゲルハルトIII世の領地として確定された。ヴァルデマーは王座を1330年に放棄し、スレスヴィ公の立場に戻った（スレスヴィ公ヴァルデマーV世）。ゲルハルトは見返りにフュン島を得たが、1331年にはデンマーク王クリストファーII世とゲルハルトとの間で戦争が起りデンマークは敗北した⁸⁾。こうした中、スレスヴィでは自律的な気運が高まり、またドイツ生まれのものあるいはドイツ語母語話者が支配層で増加し、デンマークとの関係は薄れ、ホルシュタインとの関係が密になっていた。このあたりが言語問題の萌芽となっている。

デンマーク王国そのものも借金の代償としてホルシュタイン伯の支配を受けていた。ヴァルデマーIV世復日王 Atterdag はその後20年にも及ぶ領土回復でその名を知られる。彼はシェラン島、フュン島、ユラン、スコーネの統治回復には成功したが、スレスヴィの支配の回復には失敗した。ヴァルデマーは影響力を得るため、スレスヴィ公エリクII世の娘ヘルヴィと結婚した。1373年には中心都市のひとつフレンスボーを奪取した。

1.5.

1373年アデル系のスレスヴィ公がヴァルデマーV世の息子ヘンリクで途絶えた。南スレスヴィには多くのドイツ人所有の土地が残されていたが、子供のなかつたヘンリクはその権利をデンマーク王ヴァルデマーIV世に託していた。1386年にはヴァルデマーIV世の娘マグレーテI世が、デンマーク王として、スレスヴィをデンマーク国王の下でゲルハルトIII世の孫ホルシュタイン-レンツブルク伯ゲルハルトIV世に世襲の領地として与えることを決めた。一般にシュレースヴィヒとホルシュタインの連合は正式にはここから始まるとされる。彼女もまたスレスヴィの実効支配を回復することには失敗した。

ゲルハルトIV世は1404年に死ぬが、その後彼の息子とデンマーク王の継承者でもあるポメルンのエーリヒとの跡目争いの決着は1439年まで付かなかった。1416年にはハンザ同盟による仲介が試みられたが決裂し、1421年、ホルシュタイン側はハーダースレーベン／ハーザースレウ、シュレースヴィヒ／スレスヴィ、トンダーン／テナーを再び手中にした。ま

たこの間、神聖ローマ皇帝ジギスムントも仲介を試み、1424年にスレスヴィの住民がデンマーク語を話し、デンマークの習慣に従い、自分たちをデンマーク人だと見ていることに基づいて、スレスヴィはデンマーク王に所属するという裁定を下したが状況に変化はなかった。1439年に新しいデンマーク王クリストファーⅢ世はホルシュタイン伯アドルフⅧ世にスレスヴィをデンマーク王のもとの世襲領地として金銭で認めさせた。1448年にクリストファーは死去し、アドルフは甥であるオルデンブルク家のクリスチャンを空位だった王位につける。そのアドルフの死でシャウエンブルク家は断絶したが、1460年にオルデンブルク朝のデンマーク王クリスチャンⅠ世は貴族をリーベ／リッペンに集め、彼をアドルフの後継とすることを認めさせた。その結果クリスチャンⅠ世はスレスヴィ公およびホルシュタイン公となる。ドイツ人貴族にとっても両地域を分割しないことに利益があった。ここでは両地域は永遠に不可分であるという内容の宣言がなされた⁹⁾。

1.6.

デンマーク語で Ribe-Brevet と呼ばれるリーベ協約はクリスチャンⅠ世がドイツ人貴族に対してホルシュタイン伯およびスレスヴィ公となることを認めさせたものだが、王がこの協約を破った場合には貴族側にこれに反抗する権利を保障する条項も盛り込まれていた。ホルシュタイン側は、デンマーク王がホルシュタイン伯になるというだけでデンマーク本体に組み込むことは許されていなかったため、さほど複雑な問題とは捉えなかった。他方スレスヴィ側には本来デンマーク王の領地を治めるものをデンマーク王が自らを配下とするようなわかりにくさがあった。この同意でとりわけ重要なのはデンマーク法からのスレスヴィの隔離である。依然として中世以来のユラン法 jyske lov はスレスヴィ公領では有効であった。また言語問題もここで複雑化する。リーベ協約の結果、スレスヴィには徐々に行政言語としてドイツ語が浸透するようになったのである。とくに南部ではドイツ式の典礼が宗教改革を境に教会に持ち込まれたため、段階的なドイツ語化が以降はっきりと進むこととなる。とはいえ、本格化するのは18世紀の後半になってからであり、それまでは半数以上の母語はデンマーク語であった。もちろんデンマーク王家がドイツ語話者であったことも重要な要素である。

ホルシュタインは政治的、経済的にもドイツの一部であり、もちろん言語的にも北ヨーロッパではなかったが、スレスヴィ／シュレースヴィヒはこれよりはるかに複雑な様相を呈している。18世紀初頭にアンゲルン地方から始まった大規模なドイツ語化は、14世紀から進行していた教会や行政のドイツ語化（当初は低地ドイツ語化）とも結びついて、18世紀なかばにはフレンスブルク近くに達した。フレンスブルク以南のシュレースヴィヒ／南スレスヴィで急速に進行したドイツ語化は、1864年以降ドイツに組み込まれていたフレンスブルク以北の北スレスヴィ方言域ではごく穏やかに進み、この地域でドイツ語が多数派になることは現在に至るまでない。ドイツ語話者との接触のタイプが南北で異なったことがその要因と考えられる。これについては7節で触れる。

2. 経済的背景

2.1.

北ヨーロッパの中世においてハンザ同盟の影響力を排除して考えることは不可能である。スレスヴィにおいてもハンザ同盟のプレゼンスは非常に大きなものであった。これまで述べたようにドイツとの政治的関係もきわめて複雑なのであるが、言語使用へのインパクトは経済活動においても同様に大きかった。この節では、マクロ的な経済主体であったハンザ同盟の言語使用がどのようにスレスヴィに影響を与えたかを考察する。

2.2.

8世紀以降、イスラーム勢力の伸張によりヨーロッパの地中海制海権は失われ、東ローマは西ヨーロッパと分断された。イスラーム勢力はさらにイベリア半島に進出し、フランク王国と直接に対峙することとなった。フランク王国の中世的経済秩序再編はこの二つの世界の接触によって動機づけられたといえる。地中海のない西ヨーロッパの内陸国家となったフランク王国には内陸しか残されていなかった。商業取引は域内の近距離のものが中心であったとはいえ、遠距離におよぶ大規模な商業活動も見られた。11世紀以降の地中海諸都市のイスラーム勢力に対する反撃の結果である西地中海・アドリア海貿易はその典型例である。ヨーロッパは、古代世界の崩壊による経済的混乱状態が安定の方向に変化し、農業生産の余力が最

低な状態をようやく脱する時期を迎えていた。これら2つの貿易の流れはこの状況下において成立している。さらにこうした背景で可能となった十字軍活動により、地中海の制海権が戻り、コンスタンチノポリスを中継地としてシリア・ジブラルタル軸が機能するようになった。ここで開花した資本主義的商業活動はとりあえずアルプス地方までをその範囲としていた。

2.3.

この商業化の流れはさらにアルプスを越えて北方へ広がった。11世紀以降西ヨーロッパでも中世的経済秩序が安定化しつつあり、南からの商業化の受け入れが可能であった。またすでに10世紀末には、北海とバルト海で北ゲルマン人によるバイキング活動によって、密な往来が確保されていた。さらに占領地であるイングランドやノルマンディとの往来も頻度を増していた。南方からの商業化の流れはこのような背景と結びつき、北海・バルト海貿易というカテゴリーを成立させた。

もともとバイキング活動は広い範囲に及んでいたこともあり、彼らの商業圏もそれを踏襲する形で大きなものとなった。市場も拡大し、フランドルの毛織物産業は工業としての発達を遂げることになった。結果的にバイキング活動は北海・バルト海沿岸地域の商業活動の起爆剤として機能したことになる。毛織物の産業化の進行によってヘント、ブルッヘなどの新興フランドル諸都市の富裕化が起こり、反面それまでの海運の担い手であったフリジア人は表舞台からの退場を余儀なくされた。バイキング活動中から生活圏を狭められていたフリジア人は、すでに8世紀ごろにはユトランド半島西岸の島嶼部に移住を開始、10世紀には半島本土へも移住した。ユトランド半島のうちフリジア人が移住したのは、耕作に適さない、政治的にも空白の地域であった¹⁰⁾。

バイキング活動の終結により、経済的先進地域である西ヨーロッパ圏の拡大圧力が強まり、北ゲルマン人の地域とドイツとの境界は北に押し上げられていったが、それは急激とはいはず、漸進的なものであった。フランドル諸都市は海上に直接進出することなく、当初はこの役割は北ゲルマン人が担っていたこともこれに寄与しただろう。

2.4.

ところがハンザの台頭によって状況は大きく変化する。ハンザ諸都市は本来は海洋を生活の場としていたわけではなく、大きな意味での商業活動の一環として都市間の交易を行い、その手段として海上交通を手中に収めていた。いわゆるハンザ同盟の原型は12世紀後半には成立の要件を満たしたと考えられ、同時に低地ドイツ語の広範囲な使用への道を開きつつあった。民族移動期以降のバルト海沿岸から内陸にかけての地域では、低地ドイツ語話者であったザクセン人とスラブ語話者との言語境界線あるいは領域が形成されていた。12世紀半ばからのゲルマン語話者のエルベ以東への植民が始まり、スラブ語地域へ圧力が加わる。この東方植民への参加者は各階層に及び、貴族、商人、手工業者、農民などが含まれていた¹¹⁾。

2.5.

リューベックは、本来スラブ人の商業地であったが、12世紀半ばその近隣にホルシュタイン伯アドルフII世が手工業者を住まわせることで本格的な発展が始まった。移民は北ドイツからの商人を中心であり、1159年にはそれまでのスラブ系住人を含む形で新しい都市として成立している。バルト海・北海沿岸地域を中心とする経済圏は当時英仏海峡からノヴゴロドまで広がっており、リューベックは地理的にもその中央に位置していたため中継地として栄えた。さらに続く東方植民とそれに伴うバルト海南岸地域の発展もリューベック反映の背景として挙げるべきだろう。リューベックから新しいバルト海南岸の植民都市への移住も多かったことは、低地ドイツ語の普及に寄与し、さらに植民都市間のネットワークにおけるリューベックの地位もそれに伴って高まった。よく知られているように、これが後のハンザ同盟のプロトタイプである。

ヨーロッパ全土を襲ったペストによる人口急減とそれによる農業生産力の低下を背景に、ペストの影響をさほど受けなかった北ドイツ諸都市は勢力を拡大した。1350年に正式に成立したハンザ同盟は、軍事力を整備し、広大な範囲をその支配下に置いた。その結果大量のドイツの商人、手工業者などが北ヨーロッパに流入し、とりわけ都市では特権階級化した。ただし当時の低地ドイツ語はあくまで点的に展開するのみで、境界領域の大規模な北上はこの時期とくに観察されない¹²⁾。

3. ハンザ同盟の衰退の影響

3.1.

ハンザ同盟は大航海時代に大量に流入した南米産の銀がさらなる大きな商業化、経済的再編を引き起こしたことによりして、15世紀から衰退の兆しを見せる。商業化の範囲がさらに広がり、世界的規模の商業に吸収されたのである。このハンザ同盟の衰退と同期して、低地ドイツ語の衰退も進行した。それまでハンザ同盟の支配する地域で共通の書記言語として通用性を誇った低地ドイツ語は16世紀から17世紀にかけての数十年で、より大きい通用性を持つに至っていた高地ドイツ語にその地位をあっさり譲り渡すことになった。ベルリンでは1504年、ハンブルク1600年、リュベック1615年、シュレースヴィヒ1600年、フレンスブルク1626年が各都市で低地ドイツ語がそれぞれ最後に正式に文書で使われた年である。

3.2.

バイキング活動終結後の言語境界線あるいは領域は、経済圏の境界とは一致しないという特徴を示す。ユトランド半島は経済的にはヨーロッパの大きな流れが直接作用する地域でもあったわけだが、言語的な状況の変化はおもに都市部に限った現象であり、それ以外の農村部では依然としてそれほど明確ではない境界が中世以降も継続して存在してきた。この都市と農村という二面性が低地ドイツ語の方言分布、さらにはデンマーク語から低地ドイツ語へのシフトにも大きな影響を与えていた。

また経済的な境界には次のような規定要因もある。おもな海運路は、砂地であるという地理的条件で港湾建設が困難なユトランド半島西岸をスキップする形で、デンマーク海峡などの東部から半島北部を経由後南下して西ヨーロッパ主要部と結んでいた。一方主たる陸路は半島の付け根を押さえるハンブルクの影響下にあった。ここから半島東岸諸都市を経由し、フュン島、シェラン島のコペンハーゲン、さらにはスカンジナビア半島南部のスコーネ地方を結んでいた。デンマーク王国の首都コペンハーゲンは商業資本主義的発達の中心地となっていました。その結果、デンマークでは島嶼部に重心が移り、ユトランド半島の相対的空洞化が進行した。17世紀のスコーネ地方の喪失もコペンハーゲン集中傾向に拍車をかけている。ユトランド半島の重要度は経済的には低下したのだが、各主要都市に居住す

る商人や手工業者であるドイツ系住民を介して南部、つまりは北ヨーロッパの外部と接しているという図式は確固たるものになっていた。さらに前節で述べたような政治的背景も、北ヨーロッパの入り口であるデンマークを南からの強い影響下にさらす要因であった。

4. 低地ドイツ語

4.1.

これまで述べたように低地ドイツ語はハンザ同盟の絶頂期、ヨーロッパ的規模で用いられていた。伝統的時代区分では中期低地ドイツ語に相当するこの時期、もちろん地域的な特性は認められるが、残されている多くの資料はハンザ同盟の主要都市が使用域に当たる北低地ザクセン方言の特徴を示している¹³⁾。低地ドイツ語には多くの等語線が設定でき、明確に方言を区分するのは困難であるが、通常は動詞の現在形複数語尾を基準として西部方言と東部方言に大分類される。前者では -et、後者では -en が標準的な現在形複数語尾である。東部方言は東方植民に伴って使用範囲を広げたと考えられるのに対して、西部方言は古期低地ザクセン語あるいは古期低地ドイツ語を歴史的に継承しており、さらに北低地方言、西ファーレン方言、東ファーレン方言の3つに下位分類される。

当該地域を含む北低地方言には次のような下位分類が設けられている：東フリースラント方言、オルデンブルク方言、エムスラント方言、北低地ザクセン方言、ホルシュタイン方言、シュレースヴィヒ方言¹⁴⁾。

4.2.

シュレースヴィヒ方言の現在形複数語尾は大部分が -en であり¹⁵⁾、隣接のホルシュタイン方言の -et と対比をなしている。シュレースヴィヒ方言の成立にはデンマーク語の南ユラン方言からの言語シフトが密接に関連している。この言語シフトは必ずしも南ユラン方言から低地ドイツ語というわけではなく、低地ドイツ語と高地ドイツ語の入れ替わりも関与する現象である。このことはシュレースヴィヒ方言の特徴に大きな影響を与えていく。シュレースヴィヒ方言内部の分類については後述する。ここではまず周辺の諸方言とシュレースヴィヒ方言の関係について述べる。

北低地方言の属する諸方言はいくつかの重要な特徴で分類でき

る。

- a. エムスラント方言と北低地ザクセン方言の語末音消失
- b. エムスラント方言の二種の長い a (西ファーレン方言と共通)
- c. ホルシュタイン方言とシュレースヴィヒ方言の語末における二重母音化
- d. 東フリースラント方言とシュレースヴィヒ方言の現在形複数語尾 -en

これらを指標に 6 方言を分類してみる。まずオルデンブルク方言は他の方言ともっとも共通性を高く示す。エムスラント方言、ついでシュレースヴィヒ方言は他の方言とあまり特徴を共有しない。後の 3 つは大体同じレベルである。

次に中期低地ドイツ語の母音がそれぞれの方言でどのように実現されているかを見てみる。

長母音 ê :

	Ostfries	Oldenburg	Emsland	NNSachs	Holstein	Schleswig
(1) brêf, kêse	ei	e:	ei	ei	ei	e:
(2) klêt, flês	ei	e:	ei	e:	ei	e:
(3) klêne, sêsne	ei	e:	ei	ei	ei	e:
(4) dênen, dép	ei	e:	ei	e:	ei	e:

長母音 ô :

	Ostfries	Oldenburg	Emsland	NNSachs	Holstein	Schleswig
(1) blôt, dôk	ou	o:	ou	ou	ou	o:
(2) bôm, grôt	o:	o:	o:	o:	ou	o:

Stellmacher 1981: pp. 64–68 より作成

オルデンブルク方言は、二重母音化していない点でシュレースヴィヒ方言と共通性が高く、逆の他の方言とは明らかな差異を示している¹⁶⁾¹⁷⁾。

オルデンブルク方言とシュレースヴィヒ方言との共通性はひとまずおいて、それ以外の諸方言は共通した二重母音化を示していることを指摘できる。ドイツ語化したシュレースヴィヒ方言には見られずホルシュタイン方言などには認められる二重母音化は、語末音消失と同様、ユトランド半島

北部のデンマーク語諸方言と共に共通の特徴であると考えられる。

4.3.

すでに指摘したように、シュレースヴィヒ方言では、動詞の複数現在形語尾として他の北低地方言で一般的な -et ではなく、低地ドイツ語の東部方言の特徴でもある -en が用いられている。この等語線は n/t 線と呼ばれるが、その位置は（少なくとも戦間期までは）流動的でもある¹⁸⁾。

シュレースヴィヒ方言は統一的なものではなく、多くの等語線を含んでいる。これには歴史的経緯がおおいに関与していて、そのうち第一の要因は北部における、ドイツ化 Eindeutschung と呼ばれるデンマーク語からドイツ語への言語シフトであることは明らかである。また言語シフト以外にもそれ以前の言語接触は当然考慮されなければならない。ドイツ化のプロセスについて Bock(1933) は次の要素が関与する可能性があると指摘する：

- ① ホルシュタインと南部シュレースヴィヒの低地ドイツ語方言の伸張
- ② (バルト海沿岸地域に見られたような) 植民の影響
- ③ 中期低地ドイツ語の書記言語、それに影響を受けた当該地方の都市の言語

ところで n/t 線に関しては、シュレースヴィヒ方言はおよそ次のような区分がなされる。

-en 北部 (アンゲルン、中部シュレースヴィヒ方言)

-et 南部 (シュヴァンゼン、デーニシャーヴォールト、南シュレースヴィヒ方言)

n/t 線の南側つまり -et を持つ方言は地続きのホルシュタイン方言との連続性を示している。歴史的には低地ドイツ語方言の伸張と植民の双方がこの分布には寄与していると考えられる。一方の北側つまり -et を持つ方言は、地続きの方言の影響ではなく別の基準、この場合中期低地ドイツ語の書記言語の影響下にあったと考えるべきである。もちろんハンザ同盟が影響力を失って以降の高地ドイツ語の影響についても考慮する必要があるだろう¹⁹⁾。

4.4.

et- 地域では、中期低地ドイツ語の i が y として現れることがあるが（例えば sind/bin synd/byn など）、この現象は -en 地域には見られない (Bock

1933: 210)。改まった場面ではこのような調音は避けられたらしく (Bock 1933: 211)、これは規範的ではない、という認識を話者が持っていることが伺われる。また -en 地域では名詞の複数語尾が消失しない形が支配的であり、これら方言がより規範を指向していることを示している²⁰⁾。

-en という語尾は低地ドイツ語の書記局 Kanzlei の言語習慣と一致する。方言的には -et が優勢であったであろう地域に -en が見られるのは、書記の能力のある都市の住民層の言語習慣を反映すると考えるのが自然である。オルデンブルク方言が -en を持つことが有力な傍証となる。もちろん植民地である東部の方言が -en 地域であることにも同じ説明ができる。また上述の二重母音化の分布も同様の解釈が可能である。むしろ -et 地域はこうした都市部の言語習慣から自由であったというべきであり、ドイツ化が周辺部より早かった当該地域のフレンスブルク、カッペルン、シュレースヴィヒ、フーツムなどの都市部で -en 地域化が先行していることがこれを裏付ける。-en という規範的形式が導入されたアンゲルン地方と比較してドイツ化が遅かった中部シュレースヴィヒでは、この都市の言語習慣の規範性が及ばず、南シュレースヴィヒからダーネヴィアケを越えた -et の圧力に抗しきれず、-et 地域となつたと考えられるだろう。

4.5.

高地ドイツ語の影響は語彙の面でははっきりと現れる。Bock の調査ではアンゲルンと中部シュレースヴィヒではより多くの高地ドイツ語的要素が観察される。より正確にはアンゲルンおよび中部シュレースヴィヒ北部ではより影響が大きく、中部シュレースヴィヒ南部、シュヴァンゼン、ダーニシャーヴォールトではそれより少なく、南シュレースヴィヒでもっとも少なくなっている (Bock 1933: 214-215)。アンゲルンおよび中部シュレースヴィヒ北部を高地ドイツ語の影響の強い地域と考えるならば、当然 -en 地域との重複が指摘できる。書記言語を背景に成立していた規範性と高地ドイツ語がさらに結びついたと考えるのが妥当であろう。

ドイツ化したデンマーク語の南スレスヴィ方言の影響も考慮しなければならない。もっとも明白なのは z 音に代わって現れる s 音であろう。デンマーク語を含むすべての北ゲルマン諸語には有声の s つまり z 音は認められない。当該方言にはこの他にもデンマーク語の基層の影響と見られる要素が散見される。語彙に関して興味深いのは、アンゲルンにおいて、後に

ドイツ化した中部シュレースヴィヒよりも多くのデンマーク語語彙が認められることである (Bock 1933: 219)。19世紀半ばの二言語話者の観察では、両言語である語彙が同じ音形になる場合、その語彙は避けられる傾向にあったという²¹⁾。アンゲルンでは、デンマーク語から直接というより、一度ドイツ語となったデンマーク語からの借用語彙が流入した流れも想定する必要があるかもしれない。いずれにせよ、言語に対する態度とドイツ化の時期にはなんらかの関連性があるのは確かである。

5. 二重母音化

5.1.

現代デンマーク語では、他の北ゲルマン諸語と異なり、母音の弁別に関して音価より長さのほうが重要である (Basbøl and Wagner 1985: 48)。これには次のような歴史的経緯がある。北ゲルマン諸語には、歴史的に子音の長さが弁別的となった時期があり²²⁾、デンマーク語以外では母音は長さではなく音価の差が重要になっている。この時期、アクセント母音が短い閉音節は、母音を延長するか子音を重子音とするかのどちらかで延長され、長母音＋二重子音の音節は短縮された²³⁾。ところがデンマーク語では14世紀半ばに重子音が短縮される傾向が強まり、子音の長さは弁別に寄与しなくなった。

デンマーク語では、アクセント母音が短い音節からなる単音節語での母音の延長はあまり徹底して行われなかった。他の言語では母音が延長されるケースで、韻律の一部と考えられる声門閉鎖音が短母音と共にすることは、デンマーク語が別の方向での発達を遂げたことを示している (Haugen 1984: 326–327)。デンマーク語では非強勢音節の消失による二音節語の単音節化が他の北ゲルマン諸語と較べて明らかに多い。ノルウェイやスウェーデンでは韻律的なアクセントの導入によって区別するようになったが、デンマークでは対応する単音節化した語の母音に声門閉鎖音を超分節的特徴として加えることで対応がなされている²⁴⁾。

5.2.

共通北ゲルマン語の長い *a* は北ゲルマン諸語では共通して後舌方向に移動している²⁵⁾。延長された *a* は前舌方向、*æ* の位置に移動した。また狭い

母音の調音点が下がる傾向が1300年頃の写本から認められ、連鎖的にその傾向は波及した。このことは現代デンマーク語の綴り字と発音のズレに影響を及ぼしている²⁶⁾。

中期低地ドイツ語では、西ゲルマン語の長いaは⟨â⟩あるいは⟨ô⟩で現れる。西ゲルマン語のauは古期低地ドイツ語では長いaかoであるのに対して、中期低地ドイツ語ではほとんど⟨ô⟩で現れる。本来の⟨ô⟩の調音点に母音が集中することになり、異化の動機付けはここでなされていたと考えられる²⁷⁾。

古期低地ドイツ語ではaのみに見られた口蓋化(i-ウムラウト)は、中期低地ドイツ語ではuとoにも拡大した。もちろんこれは後続の非強勢母音の弱化と関連した現象である。

aが上がることで直上のɛより上の母音を圧迫し、いわゆる押し連鎖push chain changeを引き起こす可能性がある。aそのものも区別を維持するために後方に移動しうる。またauに由来するoは一般的な傾向と同様に少し上がり気味であるならば、後舌母音の系列を同じように圧迫することがある。

現代のホルシュタイン方言の二重母音化現象は、実際このような母音体系のシフトを背景にして生じている。一方デンマーク語の南スレスヴィ方言では次のような変化が見られた。

I 本来の長母音aが後方へ移動

II 母音aが延長されたaを前寄りで調音

両方言に見られる変化は並行的な現象と考えられるであろう。南スレスヴィ方言での一連の変化は13~14世紀に起きたものである。中期低地ドイツ語で口蓋化によるaの表記に変化が現れたの14世紀になってからなので(Krogman 1970: 241)、ほぼ同時と見てよい。母音体系の変化からこの二重母音化を位置づけてもやはり並行的変化の所産であると結論付けられる。

当該地域ではその他にも多くの言語現象が境界をまたいで観察される。マクロ的に見るとヨーロッパで生じた大きな傾向が西ゲルマン語と北ゲルマン語の境界を超えて分布する現象であるが、実際にこのようなことが起るためには担い手が必要であることはいうまでもない。このようなタイプの伝播には一般的には二言語使用が前提として想定される。当該地域で言語シフトを含めた伝播がどのように進行したのかを次節で検討したい。

6. ドイツ化

6.1.

南スレスヴィでは低地ドイツ語化はモザイク状に進行した。まず都市へのドイツ人の流入がその第一の要因である。とくにフレンスボー／フレンスブルクとスレスヴィ／シュレースヴィヒの両市は中世後期に二言語化された後、周辺部への低地ドイツ語波及に大きな役割を果した。もちろんこれにはハンザ同盟の言語としての低地ドイツ語の有用性が寄与している。14世紀以降のハンザ同盟の政治的文化的影響力は全北欧地域を覆うものであって、たとえば1325年には公領の公文書が低地ドイツ語で書かれ始め、1329年にはデンマーク王がホルシュタイン伯との文書のやりとりで低地ドイツ語の使用を開始している。

ゴットルプ城を居城としたシャウエンブルク家は低地ドイツ語を行政用語として使用した。シャウエンブルク家がシュレースヴィヒで断絶する1459年まで、ホルシュタインからドイツ語を話す貴族たちが、ドイツ語や習慣などを直接持ち込んできた。ただ、法廷では低地ドイツ語が導入されていたが、ユラン法という古い法秩序は保たれていた。

また教会の役割も重要であった。中世後期には、聖職者は一般大衆と接する唯一の学識者であり、彼らには教義を大衆に理解させる必要があったが、これをすべて方言で行うには困難が伴った。そのような場合に文化語 kultursprog あるいは国家語 nationalsprog と呼ばれる言語が補助的に用いられた (Gregersen 1981)。当初はデンマーク語が用いられていたが、これが次第に低地ドイツ語にとって代わられることとなる。その状況を Gregersen はおよそ次のように述べている：

『司教区内の教育に携わっていた司教座聖堂参事会 domkapitel は、リーベとオーゼンセにあって、どこではデンマーク語がラテン語と並んで国家語として用いられていた。そのほかにスレスヴィ司教区があり、スレスヴィとハーザースレウに2つの参事会 kapitel が置かれていた。

ハーザースレウの参事会は kollegialkapitlet と呼ばれ、ゲナー湾とコレンフィヨルドの間を担当していた。1309年に施行の規則では、将来この地域で聖職に従事することを希望するものは、ハーザースレウで最低2年間の教育を受ける必要があり、その場合の教育言語はラテ

ン語とデンマーク語ということになっていた。

1352年に制定されたスレスヴィ司教座参事会聖務区 *Det slesvigske domkapitels embedsområde* では、アイザー川からロイトーラウステッドーホストルプ（テナー付近）以北を担当地域としていて、ここでも将来の聖職への従事の条件として、最低2年の修行が義務づけられていた。1325年以降は、聖俗の主導権がドイツ人に傾き、（デンマーク語ではなく）低地ドイツ語がラテン語と並んで国家語としての地位を認められた。これによりスレスヴィ司教座参事会では、デンマーク語南ユラン方言（あるいは北フリジア語）を母語としていた若者たちに、低地ドイツ語が「高められた」ことばとして植え付けられる事態となつた。

このような傾向が一般化し、宗教教育の場では低地ドイツ語が普及した。ラテン語あるいは地域方言では説明しきれない場合には低地ドイツ語が用いられるようになった。書記もこれと結び付けられ、文字を用いた大衆の教化にも低地ドイツ語が用いられるようになった。このため多くのデンマーク語南ユラン方言話者が低地ドイツ語に慣れ親しんで理解するようになり、これをより気高いものと感じるようになつていったのである。』

(Gregersen 1981: 148-9)

6.2.

ここでフレンスボー／フレンスブルクとスレスヴィ／シュレースヴィ二両市における状況を見てみる。フレンスボー市では1284年にデンマーク語で起草された都市法が1431年に低地ドイツ語に翻訳されている。しかしこれ以降もデンマーク語の使用は一般的であり、例えば1436年の家屋および土地所有に関する一覧では、低地ドイツ語話者と思われる人口流入も認められるものの、デンマーク語話者が優勢であることが見て取れる (Bock 1933: 254)。上述のようにデンマーク語の地位は書記言語としての低地ドイツ語と比較すると低いものとなっていたのであるが、デンマーク語が優勢な周辺環境は、フレンスボー／フレンスブルク市を典型的な二言語使用都市とした。ここでは市の書記局や上層市民が正しい低地ドイツ語を普及させようとする努力は身を結ばず、デンマーク語の色彩を強く帯びたフレンスブルク独自の低地ドイツ語を出現させていた。このわかりにく

さは宗教改革時にはすでに知られるものとなっていた (Bock 1933: 255)。

スレスヴィ／シュレースヴィヒ市の状況はこれとは異なる。ここでは1400年頃には低地ドイツ語が市民の優勢な言語となっており、すでにデンマーク語的要素はないものとされていた。公領の中心地としての地位により、古いラテン語による都市法の低地ドイツ語への翻訳は自然な流れと理解された。これが書かれたのはおよそ1400年頃のことであった²⁸⁾。

6.3.

1460年のリーベ協約によってスレスヴィはデンマーク王家であると同時にスレスヴィ公爵家でもあるオルデンブルク家の支配下に入ることになる。デンマーク王兼スレスヴィ公クリスチャンⅠ世（在位1448–1481）は出身のオルデンブルク家から低地ドイツ語をデンマーク国王としての職務にも持ち込み、もちろんスレスヴィの配下への指示も低地ドイツ語で行った。彼の息子ハンス（在位1481–1513）もこの伝統に従ったが、その次クリスチャンⅡ世はスレスヴィへの国王としての書類にはデンマーク語を使用した。彼はスレスヴィ公であった叔父フレゼリクⅠ世（在位1523–1533）に王位を追われ、低地ドイツ語が再び使われるようになる。その息子クリスチャンⅢ世（在位1534–1559）もドイツ語を使用した。このようなドイツ語偏重は、アベル系統の公爵時代からの伝統が、その後のホルシュタイン伯時代にさらに強化されたものであった。

6.4.

宗教改革もまたドイツから北ヨーロッパへの大きな流れを作った。北スレスヴィの農村部と王国本体の教会ではデンマーク語が用いられていたが、南スレスヴィおよび北スレスヴィの都市部では低地ドイツ語が教会にも持ち込まれた。アンゲルンや中部スレスヴィでは低地ドイツ語は法廷や官庁で使用されていたのだが、一般にはデンマーク語が使用され続けていた。このことはスレスヴィの北部と南部との言語環境を明確に分けることとなる。その後の両地域の異なった発展の基盤はこの宗教改革による言語使用の二分にある。

しかしその低地ドイツ語も17世紀になると法廷、官庁、教会において高地ドイツ語に取って代わられることになる。高地ドイツ語は南からではなく、王国の首都コペンハーゲンから書記局の使用言語として流入した。

1530年から公爵領の書記局は高地ドイツ語に移行し、1564年以降地方議会の公文書にも高地ドイツ語が使われるようになった。16世紀終わりには貴族も高地ドイツ語化し、都市もそれに従うこととなった。教会が低地ドイツ語を使わなくなるのはさらに遅く、17世紀末である。フレンスボーア/フレンスブルクではとくに高地ドイツ語化運動が盛んであり、低地ドイツ語およびデンマーク語を排除しようとする動きが強かった。これにはクリスチャンIV世およびフレゼリクIII世に仕え、教会に高地ドイツ語を導入した西ファレン人クロツ Stepfan Klotz の影響が大きい。

6.5.

いずれにせよ、低地ドイツ語が高地ドイツ語に取って代わられたことで、アンゲルンと中部スレスヴィのドイツ化が先延ばしになったのは明らかである。Bock は Angelbo と名乗るデンマーク語主義者を引用してこれを裏付けている (1933: 258)²⁹⁾。ただし、低地ドイツ語化はアンゲルンや中部スレスヴィでも都市部を中心としてある程度は進んでおり、それが後の高地ドイツ語化に大きく関与している。

1720年にスレスヴィー公領はデンマーク王国と一体化されたが、ホルシュタインとの行政的結合は解消されなかった。このため両公領はコペンハーゲンに設置されたドイツ語書記局 Deutsche Kanzlei / Tyske Kancelli の管轄下に入ることになる。クリスチャンIV世 (在位1730–1746) は高地ドイツ語が優位な状況を変えるべく努めたが、あまり成果は上がらなかった。その後1810年にフレゼリクIV世によって、高地ドイツ語が用いられていた教会、学校、法廷などの言語をデンマーク語とする、という通達が出されたが、これも効力がなかった。その一方で19世紀のナショナリズムはデンマーク語域の南端としての南ユランと、ドイツ語域の北端としてのシュレースヴィヒ–ホルシュタインの対立を生み出してゆくのである。

19世紀になるとアンゲルンの言語シフトが問題となってくる。シフトが開始された地域では、デンマーク語と低地ドイツ語とのある程度の二言語使用とすでに述べた都市部での二言語使用が前提となっていた。1810年代から20~30年間の間に言語シフトは進行し、1841年にはアンゲルンの一部でデンマーク語が古い世代の言語となっているという報告がなされるに至る。都市部ではすでにドイツ語化がかなり進行していたが、ここでもドイツ化の激しいシュレースヴィヒ市とまだデンマーク語が多く聞かれ

るフレンスボー／フレンスブルク市とで、言語使用の状況は異なったようである。(Bock 1933: 268–269)。アンゲルン南部では1800年、アンゲルン中部で1815–1820年、アンゲルン北部では1820–1830年くらいにドイツ語が話し言葉として一般化したとされる。1850年にはアンゲルンの教区でデンマーク語のみが使われる例は見られなくなる。ただしアンゲルン北部では相変わらずデンマーク語は日常的にも使われ続けた。1848年から1850年にかけての第一次シュレースヴィヒー・ホルシュタイン戦争の結果により1851年にデンマーク語を教育言語として導入するという言語通達がなされたが、すでにデンマーク語使用は衰えた習慣となっており、意味を持たなかった。むしろ言語の押し付けが嫌われたことでその後15年に事態はさらに加速し、1863年の段階でアンゲルンのドイツ化は終了したと考えられる。

7. 現代まで

南スレスヴィのデンマーク系住民は1864年からのプロイセンの支配下、1867年には議会選挙でも過半数を占めていたものの、1871年には多数派の地位を譲る。それでも1884年にはフレンスボーでまだ40%はデンマーク系住民であった (Vollertsen 1993: 11)。1880年代にはフレンスボーにも工業化が波及し、それに平行してドイツ化も進行した。1900–1914年の間にこの傾向は安定化した。

1864年以降プロイセンその後ドイツの一部であったシュレースヴィヒ／スレスヴィについて、第一次大戦後のパリ講和会議で帰属問題が議題となった。民族自決の建前からデンマーク案の区割りを尊重し³⁰⁾、住民投票で帰属を決することになった。当該地域は、発案者の名からクラウセン Clausen 線と呼ばれる、言語と歴史的背景を根拠とした線で北部のデンマーク語が優勢と考えられた第一地区と南部でドイツ語が優勢と考えられた第二地区とに分けられた。第一地区では地区全体の、第二地区では自治体単位で帰属を問う投票が行われた。前者では75.1%がデンマークへの帰属に投票、一ヶ月後に投票が行われた後者ではデンマークへの帰属を求める投票が過半数を超える自治体はなかった³¹⁾。第一地区でも中心的都市ではドイツへの得票が半数を超えた (Rerup 1982)。アルス島も第一地区であったが、ここでもこの住民投票でのドイツへの票は過半数を超えた。1920

年当時、都市部でのドイツ化は北部でも南部と同様に進行していたが、とくに北部スレスヴィの農村部への浸透は進んでいなかった。国境の確定後は北部つまりデンマーク領内ではドイツ化は意図されることもなくなり、この状況は現在に続いている。ただし、今日普及しているのは、デンマーク語ユラン方言ではなく、標準デンマーク語のユラン変種である。

戦間期には国境の南部でのデンマーク語話者の勢力は減少傾向にあり、この傾向は戦後もしばらく続いた。終戦直後には12万から15万程度と考えられていたデンマーク系住民の数は70年には3万人程度まで落ち込んだが、この後多少振り戻しがあり、90年代には4.5万程度に回復している。南シュレースヴィヒでのデンマーク系住民とドイツ系住民の関係は、今日では安定している³²⁾。政治的緊張や言語シフトの歴史はもはや保存されるべき対象となっている。デンマークドイツ国境地域では、言語シフトそのものに関する周辺環境に関する比較的多くの資料が残されていることもあり、最近の言語接触理論の目を通して再考すべき時期なのかもしれない。いずれ稿を改めて論じてみたい。

注

- 1) 現在はスウェーデンであるスコーネ地方の方言であり、この方言をどう分類するのかはデンマークとスウェーデンの間で議論が尽きない。
- 2) その他この付近は資源が豊富であったことも指摘できる。またこの課税権も魅力的であり、900年頃にはバイキングの一派が独立を企てた。だがすぐにデンマーク王によって滅ぼされている。
- 3) エルベ川の北側は古くからデーン人とドイツ人の対立する地域であったが、スラブ人がさらにその対立に関わることがあった。スレスヴィにおける南北から伸びる勢力がどこまで到達できていたかという点について、デンマーク側、ドイツ側からの見解は一致していない。南ユランがデンマークに関わる土地であったことは疑う必要はないだろう。当初のホルシュタインが神聖ローマ帝国の版図にあり、ザクセン人の居住地であったことを疑う必要もない。シュレースヴィヒとホルシュタインは歴史的経緯によってリーベ協約にあるように不可分であるとされ、そのことが後にいわゆるシュレースヴィヒ・ホルシュタイン問題を引き起こすことになる。
- 4) さらにその息子はデンマーク王ヴァルデマー1世として即位している。
- 5) 1214年に神聖ローマ皇帝が、1217年にローマ教皇もこの割譲を正式なものと認めている。

ユトランド半島の言語接触と言語シフト

6) レンツブルクの碑文に次のような記載がある：

Eidora Terminus Imperii Romanii(神聖)ローマ帝国の終端アイダー川

いざせにせよアイダーは自然境界としての機能を持っていたのは確かである。

7) このゲルハルト治世下で、シュレースヴィヒとホルシュタインは初めて統一的統治を受けたことになる。本格的な統一はまた後の1386年とされる。

8) 国王クリストファーには小さなランゲラント島が残るのみとなり、デンマークは事実上解体された。1332年から40年までは国王も空位となつた。

9) この宣言は低地ドイツ語でなされている：up ewig ungedeelt

10) この移住はそれまでフリジア人が海運を担っていたから可能であったのだが、これもバイキング活動およびその後の北ゲルマン人による商業活動の活発化によって断絶し、北フリジア地域は他のフリジア人地域から孤立する結果となつた。

11) 多くはザクセンないし低フランケン地方出身者で構成された植民者の言語は一枚岩ではなく、この状況が後の東方植民地における言語の基盤を形成した。

12) 都市におけるハンザ関係者の特権階級化は北ゲルマン人の反発を招き、これが1397年のカルマル同盟成立に結びついたともいわれるが、結果的にこの同盟はデンマーク、スウェーデンそれぞれの国家の基盤を整備することに繋がつていった。

13) ハンザ同盟の中心であったリューベックは元来スラブ人の土地だったが、12世紀半ばにホルシュタイン伯アドルフII世によって土地を開発し移民を導入するなど都市としての基盤が築かれた。移民はヴェストファーレン出身者が多く、リューベックでは北低地方言に西ファーレン方言が混交したものが用いられるようになったと考えられている。

14) 北低地方言のうち東フリースラント方言は18世紀以降東フリジア語話者のドイツ語化によって成立している。

15) この-enは東部方言と同じ特徴である。これは規範性との関連を示唆する。

16) ホルシュタイン方言に見られる(2)の二重母音化は低地ドイツ語全体でも東部方言の一部でしか認められない。高地ドイツ語の影響はこの場合考えにくい。ここで挙げた例は高地ドイツ語では次の通り：

ê (1) Brief, Käse (2) Kleid, Fleisch (3) klein, Sense (4) dienen, tief

ô (1) Blut, Tuch (2) Baum, gross

17) オルデンブルク方言は、スレスヴィにおけるデンマーク語話者のドイツ語化に際して、地方での小さな規範として機能した可能性が指摘できる。

18) 例えばBock (1933) はMeyerの次のような記述を引用している：

Die n/t Line verläuft an der Schlei abwärts bis Schleswig, am Dannewerk entlang

nach Hollingstedt und folgt dann dem Laufe der Treene und Eider ... In der Nähe der Grenze zeigen einige gebräuchliche Zeitwörter (haben, gehen, stehen) die holsteinischen t-Formen, vielleicht ein Zeichen, dass die alten niedersächsischen Formen nach Norden vorzudringen beginnen. In Ellingstedt, Friedrichsfeld, Hollingstedt, Schawbstedt, Winnert, Ostenfeld z.B. hört man neben den allgemeineren n-Formen (t-Formen). Andererseits wird man in den Schleidörfern Schwansens noch vereinzelt n-Formen hören können. (pp.165-166)

- 19) -en 地域では現在もまだドイツ化は完全に終了しているわけではない。むしろ、第二次大戦後、とりわけ1955年のボン・コペンハーゲン協定以降の安定的なドイツ・デンマーク二国間関係における少数民族・言語の取り扱いによって、完全なドイツ化は望まれなくなっている。
- 20) これらが高地ドイツ語の影響である可能性も否定できない (Bock 1933: 213)。
- 21) Bock 1933: 219-220で述べられているように、20世紀前半の二言語の地域では二つの言語が明瞭に区別されたという。これに対してそれ以前にドイツ化された地域では必ずしもこのような意識的な区別は認められない。
- 22) Haugen (1976) は Great Quantity Shift と呼ぶ。およそ1250~1550年ごろの現象とされている。
- 23) この結果、例えば現代アイスランド語には「短い二重母音」が生じている。
- 24) このアクセント体系の成立については後置定冠詞の発達と関連付けた議論もある。詳しくは Oftedal 1953 参照。
- 25) デンマークでこの現象が起きたのは13世紀前半で、アイスランドやノルウェイよりは若干遅く、スウェーデンよりは早い。
- 26) デンマーク語において調音点のずれた状態で、母音において音価の対立ではなく質的な対立が保持されているかについて、次のように説明できるだろう。①母音に韻律的区別があること。韻律的特性 (声門閉鎖 stød) を伴わない短母音と長母音のほかに stød を伴う母音が存在する。②語末音消失が大規模に起こったも相まって、子音がさらに弱化する。その結果多くの二次的二重母音が成立している。母音が接近した場合どちらかの二重化がしばしば認められるが、新しい二重母音はこの変化を抑制する可能性がある。
- 27) Cordes and Holthausen (1973) ではこの å と ö の対立は北低地方言などでは中立化したとされているが (p. 196)、同地の現代の方言でも区別が残っている場合もあり、必ずしも同意できない。
- 28) 古い伝統法であるユラン法の翻訳も14世紀の終わりころには行われていた。
- 29) 『もし教会の低地ドイツ語が高地ドイツ語に交替するのが17世紀半ばでなければ、われわれの母語はもっとひどいことになっていたであろう。そして

ユトランド半島の言語接触と言語シフト

ついで昔から痕跡もなくなっていたかもしれない。この点に関してはクロツの功績をたたえなければならないだろう。』 Bock 1933: 258

- 30) ドイツ側はこの区割りよりも北の、 Tiedje 線を国境とする案を提出した。
- 31) 第二地区全体では20%がデンマーク側に投票した。とくにデンマーク語社会の中心都市であったフレンスボーでも過半数を確保できなかった投票結果を巡り、フレンスボーに特別な地位を求める運動が盛んとなった。対応のまざから国王が首相を更迭し、さらにそれを受け左翼勢力がゼネストを計画するなどデンマーク国内は大混乱となった。
- 32) 南スレスヴィ協会 Sydslesvigsk Forening の議長のことばはそれは明確に示している：
『われわれデンマーク人は新しいドイツにそしてドイツの民主主義に信頼を寄せている。そのドイツはまた多くのデンマーク人によって特徴づけられているのだ。』
Vi danske har tillid til det nye Tyskland og til tysk demokrati. Det Tyskland præges også af mange danske. Vollertsen 1993: 29

参考文献

- BASBØLL, H. and J. WAGNER. 1985. *Kontrastive Phonologie des Deutschen und Dänischen*. Niemeyer: Tübingen.
- BJERRUM, A. 1953. *Om det danske Dialekter i Sønderjylland*. Sønderjyske Årbøger 1953: pp. 101–124.
- BOCK, N. B. 1933. *Niederdeutsch auf Dänischen Substrat*. Munksgaard: Kopenhagen.
- CORDES, G. and F. HOLTHANSEN. 1973. *Altniederdeutsches Elementarbuch*. Carl Winter: Heidelberg.
- GREGERSEN, H. V. 1981. *Slesvig og Holsten før 1830*. Politiken: København.
- JÖRGENSEN, P. 1954. *Zum Schleswiger Niederdeutsch*. Munksgaard: København.
- KROGMANN, W. 1970. Altsächsisch und Mittelniederdeutsch, in E. Schmitt, ed., *Kurzer Grundriß der Germanischen Philologie Bd.1*. de Gruyter: Berlin, pp. 211–252.
- NIELSEN, N. Å. 1980. *Dansk Dialektologi II. Jysk*. Hernov: Odense.
- OFTEDAL, M. 1952. On the Origin of the Scandinavian Tone Distinction. *Norsk Tidsskrift for Sprogvitenskap XVI*: 201–225.
- RERUP, L. 1982. *Slesvig og Holsten efter 1830*. Politiken: København.
- SANDERS, W. 1982. *Sachsensprache, Hansasprache, Plattdeutsch*. Vandenhoeck & Reprint: Göttingen.
- STELLMACHER, D. 1981. *Niederdeutsch*. Niemeyer: Tübingen.

愛知県立大学外国語学部紀要第38号(言語・文学編)

VOLLERTSEN, N. 1993. Det Danske Mindretal i Sydslesvig, in N. Vollertsen et al.
eds., *Nation og Mindretal*. Historia: Århus, pp. 11–30.

櫻井健 2003. 「北ゲルマン語後置定冠詞の分布について」『愛知県立大学外
国語学部紀要 (言語・文学編)』35: 279–293.